

現代社会における教育・研究の質向上を目指して

江口 文陽

学校法人東京農業大学理事長

東京農業大学は、1891年、徳川育英会を母体として現在の飯田橋駅近くにて産声をあげた。本年は、開学134年、大学令により東京農業大学となって100年の記念すべき年である。

現在学校法人東京農業大学は、大学院も設置する2つの大学（6学部23学科の東京農業大学、2学部2学科の東京情報大学）、3つの高等学校と中学校、1つの小学校を有しており、大きなビジョンを持って学園化構想を展開している。すなわち法人が活力のある組織として、さらに学生と院生が輝く大学として機能するように保護者、同窓会、教職員および応援してくださる皆様のご理解をいただきながら発展してきた。少子化による児童・生徒・学生の数は減少の1途を辿っており、盤石な経営を維持推進するためには、教育・研究の質の確保・向上ならびに課外活動の充実化が不可欠である。最も重要なことは、建学の精神をしっかりと意識した豊かな教育環境の構築である。さらに、経営層のみならず法人内で働くすべての人財が、自分事と

して経営感覚を持ち、教職協働を高い視点で意識することが肝心である。さらに教育・研究機関として、ヒトを育てるために相手の心を考えた発言や行動を意識することが大切だと考える。誰もが接するヒトを意識してコミュニケーションの第一歩である「あいさつをする」、「あいさつのできる」教育環境を構築したいと考えている。その「あいさつ」は、相手に聞こえなくては意味がなく、大きな声でしっかりと相手の目を見つめてコンタクトすることが理想である。苦手なヒトもいることは承知しているが、一步一步しっかりと行動できる学園を次代にも継承したいのである。

さらに最近の高等教育のみならず初等中等教育の現場においても「探究学習」という言葉が聞かれるが、「真の探究学習」が実装されている現場は少ないように思う。探究とは、科学的な反応や自然現象・観察において疑問点を見つけ出し、それを解決するために文献検索によって計画を立て、実験などによって結果を導き出し

て考察することではないだろうか。探究学習においては、情報科学や生物学などの基本が大切になる。初等中等の時代から自然観察をしつかりと行って「問い」を見つけ出す五感を研ぎ澄ますことが、大切ではないかと思う。生活の中の小さな疑問を「問う心」を現在の日本の教育の中でしっかり展開することが、地球規模での変化にも対応可能な人間力を育むことになると考えている。

理系、文系、文理融合などといった入試制度や偏差値教育での学びの場の選択もひとつの手段ではあるが、「真の探究学習」を実践する教育・研究現場の醸成が肝心ではないかと考えている。

学校法人東京農業大学においては、我が国の「真の探究教育」に関する推進を目指して高大連携活動も始めている。法人間における探究学習の基盤整備としてオンデマンド形式の特別講義「STEAM教育講座」を2024年度から併設高校の生徒にも開講。2025年度からは

新たに包括連携協定校にも開講して法人傘下の東京農業大学や東京情報大学の広大な学術・研究領域の一端を高等学校の生徒たちにも開放する。社会課題の解決に一步進んだアプローチを展開し、中学校や高等学校における探究学習の充実化に貢献したい。高大接続の促進を目的に早期履修制度（アドバンストプレイスメント）を採用していく。特別講義「STEAM教育講座」を科目等履修生として受講し、一定の成績を収めた高等学校の生徒は、東京農業大学・東京情報大学（学校法人東京農業大学設置大学）への入学後、学則に基づき単位認定する。高校生でありながら、ひと足早く幅広く大学レベルの学問を体感できるだけでなく、単位を先取りして大学入学後の可処分時間を増やし、更なる学習と研究の時間に充てることを目指してもらいたい。学校法人東京農業大学は、今後も現代社会の教育・研究の新しい取り組みにも果敢にチャレンジしていく。